説 教　　「しゅろの聖日礼拝」　　北浜チャーチ

黒田 禎一郎

２０２０年４月５日（日）

主　　題：「ホサナ。祝福あれ。」

ーイエス都入城―

テキスト：ヨハネ１２：１２－１９

はじめに

・今週木曜日から、ユダヤ三大祭りのひとつである**「過越しの祭り」**が始まります。この祭りは、昔々ユダヤ人たちがエジプトで奴隷であった時、神によって先祖たちがどのように出エジプトしたかを覚える大切な祭りです。

・ 来週金曜日は、イエス・キリストの受難日を迎えます。受難日とは、イエス・キリストが十字架にかかり、大きな苦しみを味わわれた日です。私たちは今年も金曜日の夕べ、**「受難日礼拝」**をもつ予定です。

・その次の日曜日１２日は、**「イースター」**（復活祭）です。イエス・キリストが死を打ち破り、復活された日です。死を破ることができるお方は、神おひとりです。ですから、私たちは復活祭を覚え、神に感謝をお捧げするものです。

・皆さん！　イエス・キリストの受難なくして、イースター（復活祭）はありません。したがって、これから始まる週は、私たちにとって大切な週となります。

・ところで今日は、**「しゅろの日曜日」**(Palm Sunday)と呼ばれる聖日です。それはイエス・キリストがろばに乗り、エルサレムの都に入城された日であります。聖書は次のように記録しています。

12:12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞いて、

12:13 なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」

・人々は大声で、**「ホサナ。」**と叫び、イエスを迎えました。ホサナとはヘブル語で「今、私たちをお救いください」（save us now）という意味です。人々は手に「しゅろの木の枝」を持ち、イエスを迎えるため出て行きました。それが「しゅろの日曜日」と呼ばれる今日であります。

・では、**なぜ**、イエスはエルサレムの都に入られたのでしょうか。

なぜ、民衆はイエスを大歓迎したのでしょうか。 私はその**「なぜ」**について、今日は次の４点から考えてみたいと思います。

大切なポイント

１．　なぜ、イエスはエルサレムに入城されたか？

１）イエスのみわざ

・　人々は当時、イエスについて「うわさ」を耳にしていました。イエスはガリラヤ地方で多数の人々に語り、病人を癒やされました。そして死人を生き返らせるという奇跡を行われました。

・ヨハネの福音書１２章のはじめには、イエスによって死から生き返らされたラザロがでてきます。9 節には次のように記されています。

12:9 すると、大勢のユダヤ人の群衆が、そこにイエスがおられると知って、やって来た。イエスに会うためだけではなく、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。

・　ある人々は、イエスにひと目会いたいと願ったに違いありません。そして、できるならば、自分も癒されたい、祝福を受けたい、と願ったでしょう。ヨハネ１２章を開きますと、祭司長たちはラザロを殺そうと相談したとあります（12:10）。多くのユダヤ人がラザロのことで、ユダヤ教から離れイエスを信じるようになったからです。

・丁度そのとき、イエスと１２弟子たちは、エルサレムの都に入ろうとしていました。時は「ニサンの月の１０日」でした。

２）ニサンの月の１０日

・イエスがエルサレムに入城した日は、ユダヤ暦のニサンの月１０日でした。そこには深い意味がありました。なぜならニサンの月の１０日は、エルサレム神殿で「過越しの祭り」で屠られる「羊」が選り分けられたからです。そして１４日まで、傷やシミが無いかどうか吟味されました。

・出エジプト１２章に、「過越しの祭り」について書かれています。

12:2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。

12:3 イスラエルの全会衆に次のように告げよ。この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。

12:4 もしその家族が羊一匹の分より少ないのであれば、その人はすぐ隣の家の人と、人数に応じて取り分けなさい。一人ひとりが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。

12:5 あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。

12:6 あなたがたは、この月の十四日まで、それをよく見守る。そしてイス

ラエルの会衆の集会全体は夕暮れにそれを屠り、
12:7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。

・ イエスがニサンの月１０日に入城されたことは、 イエスが「過越しの羊」として選り分けられたことを意味します。旧約時代の祭儀には、意義がありました。「しゅろの日曜日」は、その預言が成就しようとしていた時でした。

3） 過越しの小羊イエス・キリスト

・ ユダヤ人たちは「過越しの祭り」を迎えるたびに、羊を屠っていました。しかも、その羊は１歳の雄でなければなりませんでした。
⇒イエス・キリストは、「過越しの祭り」で屠られる真の小羊でした。

・神の目には、イエスがこの「過越しの祭り」に、しかもニサンの月の１０日に、エルサレム入城が必要でした。イエスは、傷やシミの全くないお方であるからです。これはただ、神の尊いご計画でした。

・預言者バプテスマのヨハネは次のように言いました。ヨハネ福音書
1:29 その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。
「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。

● 愛する皆さん。「イエスの時」が来ました ⇒ それがエルサレム入城です
受難週の始まりでした。

2． なぜ、イエスはロバの子に乗って入城されたか？

1）ろばの子に乗るお方

12:15 「恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」

9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って

・なぜ、「大いに喜べ」とゼカリヤは語ったのでしょうか。
この聖句にはいくつものキーワードがあります。しかし、その「しるし」は「ろばの子に乗られる」ということでした。
「ろ ば」：
① 「ろば」は荷物運搬の家畜でした。
② 馬は戦争にも用いられ騎動性がありますが、それに比べ「ろば」は騎動性が低いいものです。農作業に使うものでした。

③ 「ろば」は、くびきを負わせて作業させられました。
「ろば」は、高貴な人が乗る動物ではありませんでした。

＊ このような「ろば」にイエスが乗られるとは（謙遜を示し）、平和の君にふさわしいお方であるということです。

・ヨハネ福音書１２章１５節で、「恐れるな。」と呼びかけられています。なんという幸いな励ましの言葉ではありませんか。当時の王は、今でいう独裁者に近いものでした。例えば、ヘロデ大王は、幼子イエスが誕生したと耳にした時、２歳以下の男児を皆殺しにせよと命じました。マタイ福音書

2:16 ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。

・ですから人々は、王に対して非常な恐れがありました。しかし、平和の君である王イエスは違います。神は「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。」と言われました。シオンとはエルサレムにある丘のことで、両者は同じことを意味します。

2）王である「しるし」

・皆さん。イエスは、ラザロを死人の中からよみがえらせたお方です。

12:17 さて、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたときにイエスと一緒にいた群衆は、そのことを証しし続けていた。

12:18 群衆がイエスを出迎えたのは、イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからであった。

・ 「しるし」（ギリシャ語で “semeion”）
⇒ 霊的意図があり、神の大いなる証明、神の指を意味します。
パリサイ人や律法学者たちは、「しるし」を求めました。マルコ福音書

8:11 すると、パリサイ人たちがやって来てイエスと議論を始めた。彼らは天からのしるしを求め、イエスを試みようとしたのである。

・ガリラヤ人たちは、５つのパンと２匹の魚から男だけで５千人もの人々に配布したイエスを見ました。それは奇跡をおこなったイエスの「しるし」でした。ユダヤ、エルサレムに住む人々は、死人を生き返らせたイエスを見ました。それは「しるし」でした。彼らにとって、イエスは王でした。

・「しるし」を受け入れること、それは「信仰」です。
イエスはヨハネ福音書１０章でこう言われました。

10:38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わた

しのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父にいることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」

・ イエスが、エルサレム入城されたとき、ゼカリヤ預言のように、確かにイエスは「ロバの子」に乗って来られました。世界の救い主は、白馬に乗り王宮から現れたのではありませんでした。ガリラヤのナザレ出身でした。

・ナザレから、「なんのよいものが出るだろうか」と言われた地方からでした。神が成された「しるし」(semeion)でした。それは全世界の人々が神の祝福に与るためでした。なんという尊いことではありませんか。

● このように、イスラエルの王であるお方は、正しいお方（正義）であり、救いを与えるために来られ、柔和（謙遜）であり、しかもそのお方の「しるし」は、 「ろばに乗って来られる。」というものでした。

３．なぜ、イエスは「ホサナ！」と迎えられたか？

民衆は、イエスを迎えた時、次のように叫びました。

12:13 なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」

・ この言葉は、詩篇１１８の預言でした。

118:26 祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。

・「主の御名によって来られ方」 それは当時、メシアを迎えるときの呼びかけの言葉でした。イスラエルの民は、長い間イスラエルの王を待望していました。助け主を待望していました。 イスラエルの王が現れ、自分たちの国を助け、再建してくれることを待望していました。 ですから、**「ホサナ！（save us now!！）、「祝福あれ！」**と叫びました。これが、彼らの待望心から出た言葉でした。

・当時の民衆は、おそろく詩篇１１８篇を意識して叫んだのではないでしょう。しかしイエスの到来は、民衆にとって、イスラエルの王の到来と受け留められました。イエスも父神の救いのご計画に、忠実に従われました。イエスご自身は、「過越しの祭り」で屠られる小羊であることは、知っておられました。イエスはまことに忠実、従順でした。

●ホサナという歓迎の言葉には、イスラエルの民の大きな待望と期待がありました。

４．なぜ、イエスは「しゅろの枝」をもって迎えられたか？

・群衆は「しゅろの木の枝」を取って、イエスを出迎えました。イスラエルに

は「しゅろの木」は多くあります。現在も各地で「しゅろの木」は見られます。

1）「しゅろの木の枝」

・「しゅろ」：フィオニクス（ギリシャ語） ⇒ 「なつめやし」のことです

① 「しゅろ」の葉の形は、鳥の羽状をなしている

② 「しゅろ」は、多くの果実を実らせ，乾燥させて保存食として多く用いられる

③ 「しゅろ」の葉は輪を作るなどして祝い事に用いられた

・ある文献によれば、紀元前２世紀ごろから、イスラエルでは「しゅろ木の枝」を振る行為は、国家的な祝いごとの際に行われたそうです。

・イエスのエルサレム入城に際して、民衆が「しゅろの木の枝」もって迎えたことは、 イスラエルの国を救ってくださる方は、このお方（イエス）であることを予表していました。

2）「仮庵の祭り」

・もうひとつ「しゅろの木の枝」が用いられたことに、大切な意味があります。それは「しろの木の枝」をもって迎えることは、「過越しの祭り」の習慣ではなく、「仮庵の祭り」の習慣であったことです。

・「仮庵の祭り」とは、チスリの月（今の９月～１０月）の第１５日に始まる祭りです。７日間つづき、最初と最後の日には聖なる会合が開かれます。これは、その年の収穫の終わりを告げる祭りです。そして又、イスラエルの民が荒野を放浪したことを記念する祭りでもあります。現在でも「仮庵の祭り」は行われています。

・人々は木の枝で作った仮小屋に入り、祭りを記念します。

（レビ記２３：３９－４３、民数記２９：１２－３８参照）

・民衆は「ホサナ」と叫びましたが、これは「仮庵の祭り」の時に唱える祈りの言葉です。 「ホサナ！」 ⇒ “save us now!”

・群衆はこのような中で、イエスが神の国（メシア的王国）を直ちに建ててくださると信じ、期待しました。しかし、重要なことは「仮庵の祭り」（収穫の終わり）の前に、「過越しの祭り」（イエスの十字架の死）が来なければならないことです。「仮庵の祭り」（収穫の終わり）で祝いのために用いる「しゅろの木の枝」が、イエスのエルサレム入城で用いられたことは、「神の国」到来の予表を示していました。

◎ 今日私たちは、「しゅろの日曜日」を迎えています。私たちは何を学んでいるでしょうか。⇒「聖書の信憑性」（確かさ）

・ 旧約聖書が語るメシアこそ、イエス・キリストです。

聖　書：「花は枯れ、草はしぼむ。だが、私たちの神のことばは 永遠に立つ。」（イザヤ４０：８）

・聖書のみことばは、信じるに十分値するものです。「しゅろの日曜日」に、民衆はイエスを大歓迎し迎えました。

・しかし真意は弟子たちでさえ、イエスの意図を理解していませんでした。

12:16 これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。

・人には、自分が見たいことしか見ないという性質があります。群衆の期待、弟子たちの期待・・・・・。 彼らの心はどこにあったでしょうか。地上の王を求めたイスラエル人は、この同じ週にイエスを見捨て、離れて行ってしまいました。彼らは、どこを見ていたのでしょうか。彼らがそれを理解したのは、イエスの復活後、聖霊降臨（使徒２章）以降でした。

・愛する皆さん。私たちはこの事実を過去に振り返り見ています。私たちは、何を見ているでしょうか。

まとめ

主 題：「ホサナ。祝福あれ！」
　　ーイエスの都入城―

・今日は「しゅろの日曜日」、聖書の神にどのような応答をするでしょうか。イスラエルの民衆の応答　⇒**「ホザナ！祝福あれ！」**と言い、イエスを大歓迎しました。

・「なぜ」、民衆はイエスを歓迎したのでしょうか。　４点

１．エルサレム入城の歓迎

「過越しの祭り」が始まる直前で、受難週の始まりでした。イエスは「過越しの祭り」で屠られるべき神の子羊を予表していました。

⇒ 「イエスの時」が来ました（出エジプト１２章）

２．ろばの子に乗っての歓迎

イスラエルの王であるお方は、正しいお方（正義）で、救いを与える方で、柔和（謙遜）であるお方です。そのお方の「しるし」は、「ろばに乗って来る。」（ゼカリヤ９章）

３．「ホサナ。祝福あれ。」と叫んでの歓迎

長年、イスラエルの民にはメシア待望心がありました（詩篇１１８章）

４．「しゅろの木の枝」をもっての歓迎

「神の国」の予表でした。イエスは神の国の王です。（ゼカリヤ書14 章）

＊ God bless all of you on “Palm Sunday”